令和５年度 FA 科学技術大学　卒業研究

寝取られマゾヒズムの心理的・生理的反応に関する多次元的探討

190634B　白生 霧乃

学部長印	指導教員印

目次

1. 序論 3
1.1. 背景 3
1.2. 寝取られマゾヒズムについての一般的な理解 5
1.3. 研究の重要性とその寄与 5
2. 文献レビュー 6
3. 方法 7
3.1. 概要 7
3.2. バイタル情報の測定 7
3.3. 被験者 8
3.4. 計測手段と有効性 8
4. 実験結果 9
4.1. 他大学のチャラ男とのセックス 9
4.2. あなたの同級生（キモオタ）とのセックス 11
4.3. ホームレスとのセックス 13
5. 考察 15
5.1. 寝取られ指数と生物学的反応の関連性 15
5.2. 非対称な反応の観察 15
5.3. 実験の反復性と継続性 15
5.4. ヒアリング結果 15
5.5. 総括 16
6. 所感 17
6.1. 今後の研究への展望 17
6.2. 総括 17
7. 謝辞 18
8. 参考文献 18

1. 序論

1.1. 背景

人間の性癖は多様性に富んでおり，誰に対し，どのような状況で性的な魅力や欲望を覚えるかを解き明かす複雑な概念である(世界創造論的進化学会，Guglecus，D.C.010 頃).

近年では性癖の多様化が進んでおり，様々な国や地域で性癖の人口規模，分布の調査(日本妖怪姦学会，横島，1993)が行われるなど多様な性癖への関心が高まっている.

性癖の多様化が進むとともに，性癖少数者が持つ様々な経済的，健康的不利益に関する認知も急速に進んでおり，2020 年には，百合に挟まった男性が警官により射殺された事件をきっかけに発生した性癖少数者公民権運動「百合に挟まる男・ライブズ・マター」が世界的な紛争に発展するなど大きな社会問題となった(古典的プロテスタント性学会，Hermit, 2021)

これらの運動を機に様々な業界で性癖少数者への対応が進み，2023 年にはアメリカの著名な映画賞「ゴールデンアカデミー賞」において，ノミネート資格に「百合に挟まる男，ネクロフェリア，獣姦」をはじめとした 55 項目の特定指定少数派性癖を持つスタッフの参加が義務付けられたことが大きな話題となった(参考文献[1])

しかし，上記の試みにおける困難な点の一つとして，性癖そのものの特性の調査，また治療又は抑制に関する研究は極めて少数な点が挙げられる.

百合の間に挟まる男等，現在でも不当な差別や偏見にさらされている少数性癖者にとっては，性癖の治療法，抑制手段の不足は生命財産を脅かす事態になる場合もある.

例えばサウジアラビアでは百合の間に挟まる男には死刑が法定されている他，日本においてもロリータコンプレックスに対する強引な捜査，及び基本的人権を無視した過酷な再教育プログラムへの参加が義務付けられている.(BlackSwanAssociate，Trandicckel，2001)

このように法的，宗教的または文化的背景等による性癖少数者への迫害が行われる地域において，権利保護手段としての性癖の克服又は抑制は重要な課題であり、世界各国で研究が進められている（参考文献[2]）

本研究では，特定の人物が他人によってパートナーが性的に接触される状況（寝取られ）に興奮するという，寝取られマゾヒズムという性癖について，その特性を探求し，その性癖の克服又は抑制手段の発見に寄与することを目的とする.

1.2.　寝取られマゾヒズムについての一般的な理解

寝取られマゾヒズムはとは，自身のパートナーが他者と性的に関わる様子を観測することで興奮を覚えるという性癖を指す(参考文献[3][4])．しかし，その根源や動機，またはこの性癖がどのように形成され，また維持されるのかについての研究は進んでいない．(日本ドラゴンカーセックス学会，姉傍弥太郎，1971)

1.3.　研究の重要性とその寄与

本研究は，寝取られマゾヒズムの形成と維持に影響を及ぼす可能性がある要因を探求し，これをもって少数性癖に対する回避・抑制又は克服に関する研究の発展に寄与することを目的とする．

特に，他者によってパートナーが性的に接触される状況を求めるという，寝取られマゾヒズムの性癖についての理解を深めることは，より包括的で深遠な性の理解に寄与するとともに，将来的なマイノリティ性癖に対する治療法確立に向けた基盤になると考える．

2.　文献レビュー

寝取られマゾヒズムという特定の性的指向に関する研究は，本論文執筆時点では存在しない．

寝取られという現象そのものに対しては，世界創造論的性学会(※1)の創設者である古代ギリシャの哲学者 Guglecus が自身の著書「ネトラーレ(A.C 1 頃)」にて初めて明文化された．この著書において，寝取られによる性的興奮とは、すなわちパートナーが他者と性的に関わる状況に対する感情的な反応，特に嫉妬や競争心，所有欲全般を指す広範な概念とされ，その起源はある種の自己破壊欲求である，と主張した．

「ネトラーレ」に対する最も有名な批判としては，フランスの哲学者 Bataille の著書「古典的プロテスタントにおけるサディズムとマゾヒズムに関する一考察(1821 [3])」での主張を挙げることができる．

著書の中で Bataille は寝取られの起原に自己破壊欲求が含まれる点を肯定しつつも，その自己破壊欲求は，マゾヒズムとサディズムが持つ共通性としての自己破壊欲求の変種である，との論理を展開した

つまり，寝取られに対し性的な興奮を覚える事とはマゾヒズムとサディズムという背反した性癖が混合した結果生じた精神疾患をはじめとする種々の副産物の一つでしかない，という主張である．

上述の Guglecus と Bataille の議論は寝取られの現象について広範かつ深い洞察を提供しているが，それらの視点は寝取られマゾヒズムという特定の性的指向について詳細に触れるには不十分であり，さらに両者の洞察は科学的には検証されていない仮説である．

本研究は，寝取られマゾヒズムという特定の性的指向に焦点を当て，その心理学的，生物学的特性を調査することで，これまでの議論に新たな視点を加えることを目指す．

寝取られマゾヒズムに関する先行研究が少ないため，この研究は性科学の分野における知識のギャップを埋める試みと考える．

3.　方法

3.1.　概要

この研究では，被験者 A（女性）と被験者 B（男性）を主要な被験者として選定した．

また，被験者 A が性行為を行う男性として，被験者 C，D，E を選定した．

実験は，被験者 A が他の男性と性行為を行う場面を記録し，被験者 B に見せ，その際の心理的反応及び生物的反応を測定する形式で実施した．

心理的反応の測定は，主に事後インタビューを通じて実施し，被験者 B の感情，思考，性的興奮のレベル等について詳細にヒアリングした．生物学的反応は，心拍数，血圧，脳波等を計測する機器を用いて測定した．

この実験方法により，寝取られマゾヒズムの性的指向がどの程度の強度で存在し，その指向が時間とともに変化するか否かを観察する．

このプロセスは，被験者 B が寝取られマゾヒズムの性的指向を持っているか，またその性的指向に可塑性があるかを検証するためのものである

3.2.　バイタル情報の測定

脳波は 256 チャンネル脳波測定器(A 社製)を使用し，記録を行った．また脳活動は角周波数別に 1 ミリ秒間隔であり，安静状態を 5 分間，性行為映像の再生開始から終了までを最長 30 分程度記録し，コンピュータ上のＭＲＩ画像として各電極と対応させ解析した．

心拍数の測定においては，被験者の視聴行為を妨げないこと，安価で入手性に優れること，等の理由から，近年急速に発展したウェアラブルデバイスであるスマートウォッチ(Bapple 社製)を使用した．

本研究での利用のため，1)外部機器からの測定の開始・終了操作を実行する　2)リアルタイムに外部機器への測定結果の送信　の 2 種の機能を持つプログラムを開発し，スマートウォッチに搭載した．

また，上記に対応するため外部機器として PC 1 台を使用し，1)スマートウォッチに対して測定の開始・終了を指示する　2)スマートウォッチからの心拍情報を保存するソフトウェアを開発し，搭載した．

上記 WindowsPC は脳波測定の記録および MRI 画像への変換も行うため，1 台の PC で実験データの確認が可能となった．

3.3.　被験者

本研究では，被験者 A への好意を自己申告した成人男性 1 名（被験者 B）と，彼が好意を抱く成人女性 1 名（被験者 A），その他成人男性 3 名（被験者 C,D,E）を被験者として選定した．実験の開始にあたり，予め被験者に本実験の目的および方法について十分に説明をし，実験への参加の同意を得た．

被験者 A は Bataille スケールによる聞き取りではマゾヒズム的属性を持つことは認められず，また他の疾患は特にない健康な成人男性である．

被験者 B,C,D は成人男性であり，学生 1 名，無職の路上生活者 1 名および被験者 A の同級生であった．

3.4.　計測手段と有効性

心理的反応の評価は，被験者 B の自己報告に依存している．

この方法は，寝取られマゾヒズムの感情や思考を直接探るため，この研究にとって有効である．ただし，自己報告は被験者の認識や自己表現の能力に依存するため，ある程度の誤差が含まれることを留意する必要がある．

一方，生物学的反応の測定は，客観的かつ定量的な情報を提供する．心拍数や血圧は自律神経系の反応を示し，性的興奮と緊張感を反映する．脳波測定は，特定の脳領域が活動化する瞬間を捉え，性的興奮に伴う脳の反応を明らかにする．これらの手法は，寝取られマゾヒズムの内面的な体験とその生物学的基盤を探るため，有効である．

以上，本研究の方法について述べた．これらの手法を通じて，寝取られマゾヒズムの深層心理とその生物学的根拠を明らかにすることを目指す．

4.　実験結果

4.1.　他大学のチャラ男とのセックス

は動画閲覧中の被験者 A の脳波を 256 チャンネルで解析し，時系列順に並べたものである．

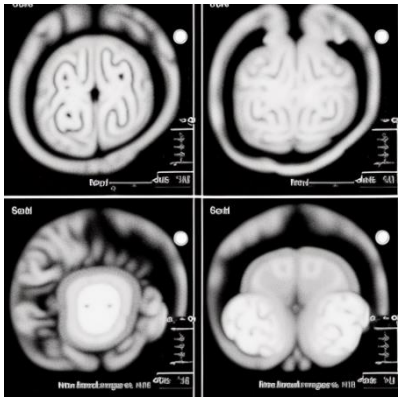

図 4.1-1 脳波①

また図 4.1-2 は動画内における寝取られ指数(※3)の推移を示したグラフである．

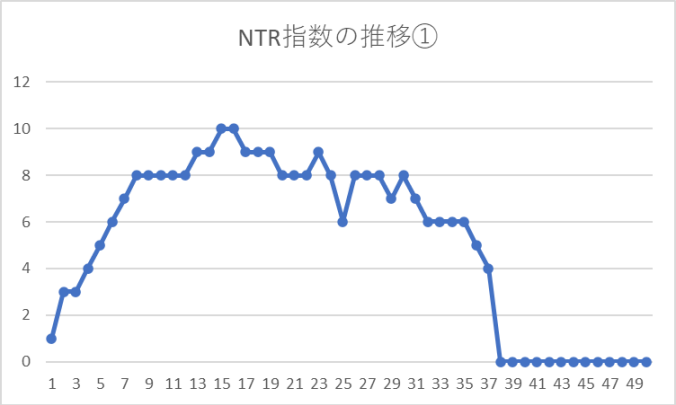

図 4.1-2 NTR 指数の推移①

図 4.1-3 は脳波/心拍の推移を示したグラフである．

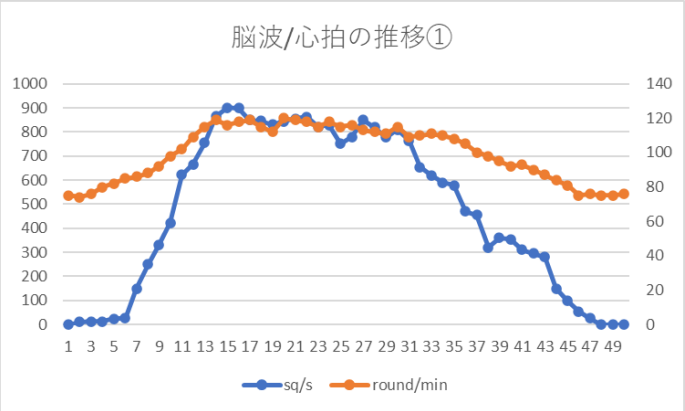

図 4.1-3 脳波/心拍の推移①

被験者 A の安静時と比較し，寝取られ指数の上昇とともに脳が活性化した.
動画再生時の寝取られ指数が最大値を示す 15 分後，β波の活動頻度は最大時には 900[sq/s]に達した.
鑑賞終了後の 5 分間で急速にβ波の発生頻度は減少し，終了後 10 分では測定下限値を下回ったため，測定を終了した

また心拍数については，被験者 A の安静時と比較し，寝取られ指数の上昇とともに心拍数が上昇した.
寝取られ指数が最大値を示してからわずかに遅れ，20 分の段階で心拍数が最大となり，数値は 120[round/min]であった.
動画終了後 5 分後には平常時の心拍数に戻った

4.2.　あなたの同級生（キモオタ）とのセックス

図 4.2-1 は動画閲覧中の被験者 A の脳波を 256 チャンネルで解析し，時系列順に並べたものである．

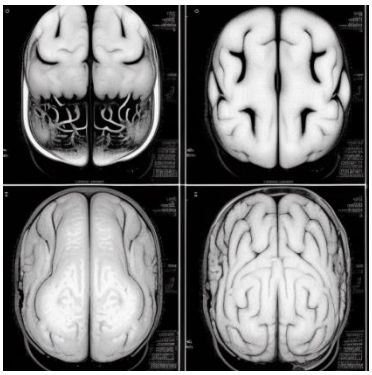

図 4.2-1　脳波②

図 4.2-2 は動画内における寝取られ指数(※3)の推移を示したグラフである．

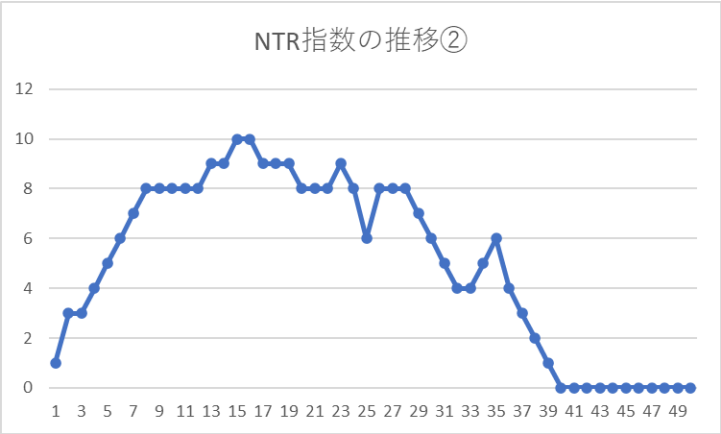

図 4.2-2　NTR 指数の推移②

図 4.2-3 は脳波/心拍の推移を示したグラフである．

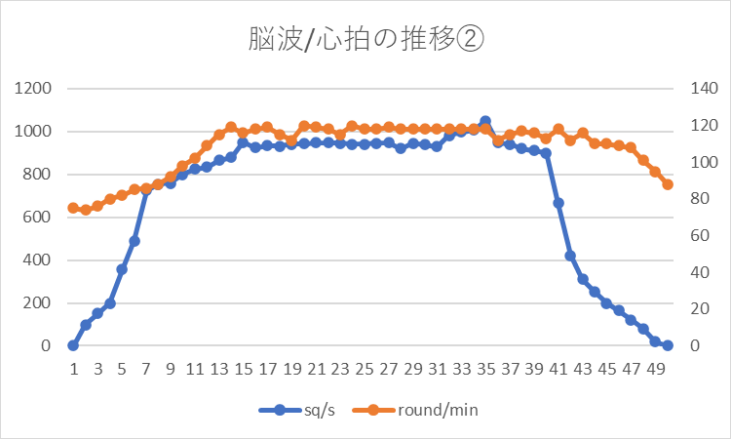

図 4.2-3　脳波/心拍の推移②

被験者 A の安静時と比較し，寝取られ指数の上昇とともに脳が活性化した.
動画再生時の寝取られ指数が最大値を示す 20 分後，β波の活動頻度が 950[sq/s]に達し，その後鑑賞終了まで 900[sq/s]～950[sq/s]を維持していた.
鑑賞終了後に再び B 波の放出頻度が上昇し，鑑賞終了後 5 分後に 1050[sq/s]に達したのち安静状態に遷移した.
終了後 15 分で測定下限値を下回ったため，測定を終了した

被験者 A の安静時と比較し，寝取られ指数の上昇とともに心拍数が上昇した.
5 分が経過した段階で心拍数が最大となり，以後動画終了時まで維持された.
数値は 120[round/min]であった.
動画終了後も 20 分以上にわたって最大心拍を維持し，40 分後に平常心拍に復帰した

4.3.　ホームレスとのセックス

図 4.3-1 は動画閲覧中の被験者 A の脳波を 256 チャンネルで解析し，時系列順に並べたものである．

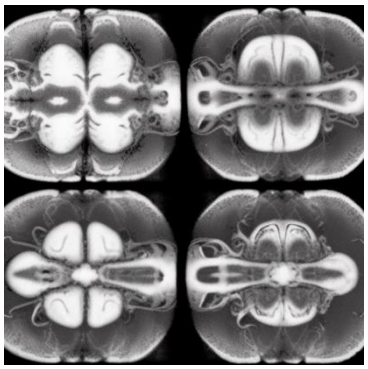

図 4.3-1　脳波③

図 4.3-2 は動画内における寝取られ指数(※3)の推移を示したグラフである．

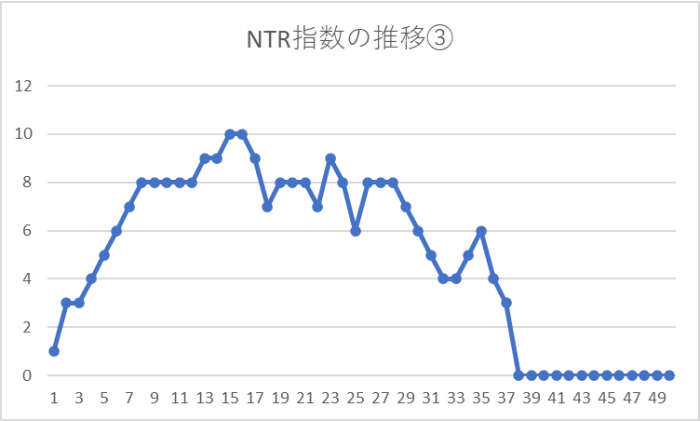

図 4.3-2　NTR 指数の推移③

図 4.2-3 は脳波/心拍の推移を示したグラフである．

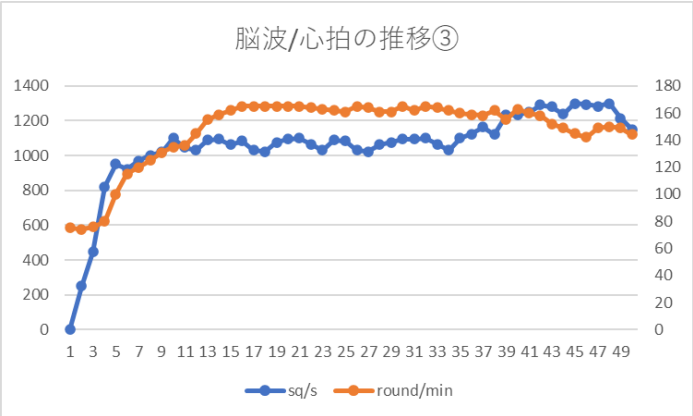

図 4.3-3　脳波/心拍の推移③

被験者 A は安静時から比較的活発な B 波の活動が見られ，その活動頻度は 600[sq/s]であった.
動画開始とともに脳活動は顕著に活発化し，5 分経過時には 950[sq/s]，10 分経過時で 1100[sq/s]に達した.
以後も脳波活動は微増を続け，鑑賞終了後再び B 波の放出頻度が上昇し，鑑賞終了後 30 分後に 1300[sq/s]に達したのち，安静状態に遷移した.
終了後 45 分で測定下限値を下回ったため，測定を終了した

図 2-F は動画閲覧中の被験者 A の心拍数の推移である
脳波での結果と同様，安静時においても顕著な心拍数の上昇がみられ，110[round/min]を維持していた.
開始直後に心拍数が最大となり，以後動画終了時まで維持された.
数値は 165[round/min]であった.
動画終了後は僅かな現象が見られたものの，20 分以上にわたって 150[round/min]を維持していたことから，終了後に医師の診断を受けた.

5. 考察

5.1. 寝取られ指数と生物学的反応の関連性

今回の実験結果では，寝取られ指数が上昇すると共に，被験者 B の心拍数と脳波活動も活発になるという明確な関連性が認められた．

寝取られ指数が増加する過程で，心拍と脳波はこの指数に追従していた．これは，寝取られマゾヒズムが特定の心理的・生物学的反応と強く関連していることを示す有力な証拠である．

5.2. 非対称な反応の観察

一方で，寝取られ指数が減少する段階で，心拍数や脳波活動がそれに応じて減少しなかった点は注目に値する．この非対称な反応は，一度興奮状態に達した後は，その状態が一定期間維持される可能性を示唆している．

また，初回の実験において認められなかった反応であることから，実験の進行に応じて強化されている可能性は否定できない．

5.3. 実験の反復性と継続性

さらに，実験が繰り返されるにつれて，被験者 B の反応は更に強化された．特に実験 3 では，実験が開始されるとすぐに高度な興奮状態が確認され，その状態は実験終了後も長期間維持された．これは，寝取られマゾヒズムの特性が実験を反復するごとに強化される可能性があることを示している．

5.4. ヒアリング結果

実験後のヒアリングによれば，被験者 B は強いストレス反応を示すと同時に，性的興奮と勃起を自己申告した．この結果は，実験で観測された生物学的指標と一致し，被験者 B が寝取られマゾヒズムの性的指向を持っていることを裏付けるものである．

5.5.　総括

　これらの結果から，被験者 B は当初より寝取られマゾヒズムに対する適性を保持しており，その適性は実験を重ねるごとに強化されていることが確認された．

　また，その強化の度合いは実験を重ねるごとに有意に上昇しており，これは寝取られマゾヒズムが状況や経験によって進行し，その進行が逆行することは少ないという新たな視点を提供する．

また，心理的・生物学的反応の非対称性は，この性的指向が持つ複雑な特性とメカニズムを理解するための新たな問題提起をする材料となるであろう．

　以上の考察を通じて，今回の研究は寝取られマゾヒズムの研究における新たな展望を提供し，その理解を一層深める貴重な結果となると考えられる．

6. 所感

6.1. 今後の研究への展望

本研究は，時間，費用，人員といったリソースの制約により，一名の被験者に依存した小規模な実験に留まらざるを得なかった．この限られた状況下で行われた調査では，研究が目的と考えていた多くの問題や側面についての洞察は不十分であることは明らかである．特に，被験者の数が少ないため，得られたデータは一般化が困難であり，この点は研究の妥当性に影響を与える可能性があることに，議論の余地はないと考える．

今後はより広範な被験者群に焦点を当て，さらに多角的な観点から寝取られマゾヒズムについて調査を行うべく，大規模な実験設計と実施が不可欠であると考える．

本研究が確認できた傾向や反応がより広い範囲で一般化が可能か否か，その確認のためにも，多様な背景を持つ被験者を対象とした研究が急募される．

このような制約にもかかわらず，本研究は寝取られマゾヒズムという特定の性的指向に関する生物学的及び心理学的側面について新しい知見を提供し，この分野の研究におけるさらなる理解と発展の足がかりを作る可能性があることも明らかであり，解明できた点は必ずしも多くはないが，多少なりともその発展に寄与できたと考える．

6.2. 総括

本研究は，特定の性的指向に対する独自の視点と方法論を提供し，その複雑な性質を少しでも理解しようとする試みとしての価値があると信ずる．

この初期研究が，より広範な研究活動や公的な支援につながることで，寝取られマゾヒズムに関する理解が一層深まることを切に望み，それによって，今回の調査結果が本分野における知識の積み重ねに貢献し，新たな研究方向や治療法の開発に資するとともに，性的多様性を広く社会に理解してもらうための一助となることを祈念する．

7.　謝辞

本研究にあたり，実験機材の提供，各種実験の支援をしてくださった日本科学技術大学の下田准教授，並びに数々の指導をくださった立島助教授，また実験に協力いただいた被験者の皆様に心よりの感謝を申し上げます.

実験においては，(株)ナカモトコンドーム社様よりコンドーム「ナカモトゼロワン」，及び膣潤滑用ローション「パパローション」，（株)NITACHI 製作所様より「マジックワンドオリジナル」の提供を受けました.

本研究成果と今後の寝取られマゾヒズムに関する諸研究の発展を，本実験への数々のご協力に対する感謝に代えさせていただき，本論文の謝辞と致します.

8.　参考文献

[1] NY 市にて警察官が白人男性を射殺「百合に挟まる男を排除した」
（ライター通信，２０２０/9/20 日版, W.R.ラーバー）

[2] 健全な権利は健全な性癖に宿る　（暗産書房，下田三郎, 2022）

[3] 古典的プロテスタントにおけるサディズムとマゾヒズムに関する一考察
（Haxford Uni, Bataille, 1821）

[4] Nocturnal (Guglecus, A.C 1)